



# ニッポン ドクター和の 臨終図巻

長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で「人を診る」在宅医療を目的とした総合診療の連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

謹賀新年。今年も正月から、お看取りが続いています。人の生死には、盆も正月もありませぬ。そして、病院から退院してくる患者さんが増える年末年始は実は在宅医が一番忙しくなる時期です。

訪問先の各御家庭で、今年の運勢について話題が出ます。余命3カ月くらいかな…という患者さんが雑誌を読んで、「ワシは今年の10月から運が急上昇するらしいわ」といってやかになる。こちらも、「ほな秋まで頑張らんとあかんね」と嬉しくなります。なんやかんや日本人の多くは占いが好きです。その象徴的存在だったのが、新宿の母

## 138 栗原すみ子 (新宿の母)



で亡くなりました。享年89。死因は誤嚥性肺炎との発表です。人類は声を出して会話をする、大きな声で歌うといった他の動物にはない術を得たこと引き換えに、口の中や喉の空間が広くなりました。その代償として唾液や食物が気管に流れ込みやすくなります。そして老化

とともに、気管に流れ込んだ異物が痰になり咳によって咯出する力が弱まり、肺に炎症が起きてしまいます。

誤嚥性肺炎は食事中に起こるものと思われがちですが、高齢者の場合、夜間睡眠中に多くの雑菌を含む唾液が気管に垂れ落ちて肺炎に至るケースが多く、老化に伴う生理現象という側面もあります。

よく介護施設で誤嚥を怖がってドロドロのミキサー食を無理やりスプーンで口につっこむようにして食べさせている姿を目撃しますが、「もっと美味しいものを手づかみでもいいから自力で食べさせてあげてよ…」と

事かも。

日々の嚥下リハビリや口腔ケアで一定の予防はできますが、高齢者が誤嚥性肺炎で亡くなることは、日常です。超高齢者の死亡診断書を書く時に誤嚥性肺炎と書くか老衰と書くか迷う時があります。誤嚥性肺炎は長生きした証なので老衰と書いてほしいと望むご家族が年々増えてきています。

一昨年(2018年)の厚生労働省の統計で、がん、心疾患に続き、老衰が日本人の死因第3位(約11万人)に急上昇した背景には、こんな事情もあるのでしょうか。

さて栗原さんが新宿伊勢丹の横で占い師を始めたのは、なんと私が生まれた1958年のこと。相談者は延べ300万人以上といえますから町医者のような存在だったのでしょう。医学生時代、私は長い行列を横目に通学していました。

実は私も、日本の行末を占い、『小説・安楽死特区』という新刊を出しました。4年後に、安楽死法案が可決するという設定です。…もし現実になったら怖いですが。

# 相談者300万人以上の町医者的存在